い釣れ釣れなるままに

２００２年思い出の渓流釣行記 PART.　１

未知との遭遇

鹿島釣狂

遠征行軍

職場の春の恒例行事で健康増進を目的とした遠征行軍があるという。職場から１２㎞離れた山間（やまあい）にある公園へ向けて出発した。暖かな日和で道端の木々の梢の新緑が萌えている。なだらかな山道を登って行くと牧草地が一気に広がり、その中に東屋やトイレ等一応の体裁を整えた公園があった。草地の全てが蒲公英（たんぽぽ）と思われるような原っぱの端を縫うように小川が流れている。公園なのでそこに幾つかの丸木橋が架けられ、長閑（のどか）な風景を醸（かも）し出している。早速、若い仲間とともにスニーカーや靴下を脱ぎ捨て川遊びに興じる。早春の小川のひりりとするような冷たさで押し殺した悲鳴が口から漏れる。川縁の草で覆われた川底に目が向いた。澄んだ清らかな流れに渓魚が潜んでいるように思えたからである。そして、川底の石を引っ繰り返して見て、川虫が豊かであることを確認する。

次の日は休日であり、午前中は曇天でグダグダとしていたが、昼を過ぎると晴れ間が覗き気温も上がってきた。転勤先が芦別と決まったときから、引っ越し荷物の中に、渓流用の竿や仕掛け等を忍ばせておいた。一式を車に積んで、芦別の釣り具店に立ち寄ってみる。店の規模が小さく仕掛け等を物色するが品数が少ない。エサのミミズと袖バリ７・８・９号を買い求める。代金を払いながら、主人に店が主催する釣り大会や釣り会がないのかと尋ねるが「ない」と素っ気ない。

昨日歩いた道を車で奥に分け入っていく。公園の丘を登りきった所に砂利を敷いた広い駐車場があるが車は一台も停まってはいない。そこに車を停めて竿に仕掛けを結ぶ。まず、公園の中の川で竿を出すことにする。初めに道路の下を通った土管からの落ち込みにミミズを送り込む。その一投に心臓が高鳴るが音沙汰なし。３．６号竿が長く扱いにくい。頭上に張り出した柳の木に仕掛けを絡ませる。少し下って、流れの速い瀬脇にエサを流そうとしている時に、一台の白い車が通りかかりこちらの様子を伺っている。エサを流す。心臓の鼓動がトクトクと脈打つ。深く息を吸い込む度に、若葉の香りと小川の匂いにむせ返る。コツコツとしたアタリに瞬間的に手首を返す。道糸が鳴り、魚が川上に向かって走る。そして、川面が割れ、銀鱗に光る魚体を縦にプルプルと震わせた。

鼓動の更なる高鳴りと息苦しさに、口を大きく開ける。手にした魚体には青みを帯びたパーマークに藍色の斑点がちりばめられている。丸みを帯びた顔にマス独特の口が深く切れ込んでおり、それは２５㎝程のニジマスであった。竿と魚を草むらに置き煙草に火をつける。

背後から声がかかる。

「ちょっといいですか。丁度通りかかったものですから。何が釣れましたか？　綺麗なニジマスですね。私は、札幌から仕事で来ているのですが、ここを通る度にいい川だなぁと思っていました。たまたま釣り人がいたものですから見学させてもらいました。」私と同じように考えていた御仁がいたことにドキッとさせられる。

彼を見送った後、川を少し下ったがアタリがない。企園の中は、樹木の下枝が祓(はら)われ手入れされているが、公園を離れるといよいよブッシュが川面を覆い、竿を振れなくなる。一旦、車に戻２㎞程下流に下ってから再び入渓する。川の中を歩き、雑木の下をくぐりながら進む。小さな落ち込みでまだサビが残った３０㎝程のニジマスが出た。さらに、２０㎝程のオショロコマも出る。白い斑点の中に散りばめられた朱点が美しい。こんな空知の田舎の小川にまだオショロコマが生息していたことに驚きを隠せない。水の中で優しくゆっくりと手を広げるとオビレを震わせ川の色に溶け込んで見えなくなった。その後も小さなニジマスやオショロコマの引き込みを楽しみ、満足してその細流を後にした。

思い出の川を捜す

午後より出動する。前回の釣行では３．６ｍの竿が長く扱いにくかったので、２．７ｍの渓流竿を購入した。前回入釣した所よりさらに下流域を攻める。山側の崖に沿って蛇行している部分の渓相が荒い（細流に変わりはないが幾分)。「居る」という確信のもてる深みのある箇所で、慎重にミミズを流す。快いアタリとともに２５㎝程のニジマスが出た。さらに良さそうな深みが続いたが、魚は全く出ない。１㎞ほど下って浅瀬が続さ、そこからオショロコマがポツン、ポツンと出る。本当に妖精のように可愛い奴だ。手のひらをいったん川の水で濡らしてから優しく包み、傷口を大きく広げないように針をはずして、その細流に戻す。

田に水を引くための堰堤に出くわした。その上は深い大きな潜まりになっているが魚はいない。それより下流はさらにチャラ瀬が続き、望みは薄いと考え上がることにする。

深川市に勤務した青年時代に入渓し、ニジマスを初めて釣りあげた川を探してみた。内大部川の支流だと思われるが記憶が定かでない。芦別から道々旭川線を走ると旭川市と深川市の標識が入れ替わって出てくる。内大部川を挟んで市の境界線が入り組んでいるのだ。オロウエン川とかオロチョン川の名前が出てくるが当時の感覚が戻らない。豊岡地区、菊丘地区、吉住地区、更新地区などの川を見ながらドライブするうちに夕闇が追ってきた。

ヤマメ

職場対抗のソフトボール大会が歌志内の球場で行われた。一応、北海道大会出場をかけた地区予選の決勝戦である。対戦相手チームは上砂川・新十津川混成チームである。我が芦別は私がセカンドを守ることになる程度のチームであり、５回コールドを食らう惨敗であった。１，２回はまだ同等の戦いをしていたのだが年配者が多く体力が続かなかったのである。残念会を兼ねた慰労をという気さえ起こらないほどの惨めさであった。

試合が終わったその足で釣り具店に行き、養殖ぶどう虫を購入した。店主に芦別近郊でよい川がないかを尋ねてみる。芦別にはこれといった川がないので釣り人は皆、富良野、金山方面に向かっているそうである。芦別では唯一〇〇の沢にマスが上がっているようで、ヤマメが少し釣れると言う。なんと、その沢は私の住宅の裏を流れるパンケ幌内川の支流である。住宅から５０ｍも歩けばすぐに川なのがとっても都合がよい。

自宅で竿を伸ばして仕掛けを結び、川縁の斜面を下りて行く。瀬についたウグイが８匹ほどかかった。婚姻色に腹を赤く染め、頭には白い突起のような斑点がブツブツとついている。雌の腹からは黄金色の卵が零れる。パンパンに張った雄の腹からも乳白色の滴がしたたり落ちる。腹に触らないようにしてそっと川に返す。マス類の生息地はさらに上流域になるようだ。

〇〇の沢に沿って続く道路が工事中のため一旦途切れ、そこから川に下りて行った。低い潅木やイタドリが覆う中を漕ぎ分けてやっとの思いで川筋に出る。かなりの距離を遡って、やっと４匹の新子ヤマメと遊ぶことができた。

爽快の感情の源

本日は丸一日の予定で早朝より石狩川水系内大部川の支流に向かう。沢に沿って田圃が続いており、農道を終点まで行き着いた所から入渓する。入渓した箇所より上流に堰堤が５つほどあり、各堰堤下で、ニジマス５．６匹の釣果であった。

ズンズンと山奥に入って行くと、勾配がきつくなり川の形相もよくなってきた。滝があった。川筋の左側１０ｍ程の崖から落ちてきて川に注ぎ込んでいる。細い滝だがその飛沫を浴びながら川縁に立った。流心部はU字溝のような掘割が続いており、その中から型のよいニジマスが出た。

崖に根付いた潅木を頼りに空身で滝の上に出て見た。そこには小鳥の囀りだけがあり、太古から続く森だけがあり、岩を刻んで流れる渓谷だけがあり、文明を感じさせるものは一つもなかった。しかし、現代の人間にとって最も必要としているもの、樹木の聞から零れる陽光があり、澄み渡る清廉な川の水があり、酸素が満ち溢れた清浄な空気があり、文明に侵された私の体を蘇生してくれるものがあった。そこに立つと体の底から活力が蘇ってくるのである。そして、滝の上から下界を眺めると、その先々に文明の兆しが見え、己を含めた人間の不浄さを感じてしまうのである。

おそらく近代文明の進行というものは、その資源の枯渇や弊害のために停止せざるを得なくなるまで続くだろうと私は想像している。それは地球の近代文明への復讐であるとさえ考えられる。ただそうなった時、人は一体その生活様式、思考を如何に変化させ、そこに適応させていくべきであるか・・・。

陽光が大樹の陰に隠れ、頻りに囀っていた小鳥も塒（ねぐら）に帰ったようだ。私もまた、この爽快な感情を感じさせる場から一歩一歩下りて行かなくてはならない。滝からの帰りはぶどう虫がなくなったのでミミズで釣り下がる。左回りの堰堤で本日最大３３㎝のニジマスが出た。

昨日の釣果は全て持ち帰って塩を振っておいた。地域のふるさと公園まつりがあり、パークゴルフ大会の後、焼き肉パーティがある。パークゴルフは熱年の皆様が日頃の練習の成果を遺憾なく発揮したのに対して、働き盛りのものは皆散々たる結果であった。私も女房とともに尻から数えて最初の順位だった。

焼き肉用の炭火が配られ、ジンギスカンやホルモンがジュウジュウと音を立て始めると、ビールや焼酎で乾杯する。女房は肉が全くだめなので、昨日から仕込んだニジマスを炭火焼きする。焼き肉の匂いに混じってニジマスの香ばしい匂いが漂い始める。私たちが食べるのはせいぜい１．２匹なので周囲の家族にも振る舞い、賞味していただいた。これが頗（すこぶ）る評判がよかったのは言うまでもない。

芦別大滝

本年度、芦別市に転入した者を対象にした市内見学会があり、そのコースの中に滝里ダムがあった。管理事務所での発電の仕組み等の解説の後、ダムのコンクリート壁の内部にも入らせていただいた。案内していただいた職員の説明の中で、滝里ダム湖にニジマスの放流事業を計画したが在来種などの生態系に変化を及ぼすことを危惧して中止になり、芦別川に放流されたということが話された。また、ダム下流域ではニジマスを狙った釣人が絶えず、ダムの放水時にはスピーカー等で注意を促しているということである。

その話があった次の休日には、早速、私は空知川芦別大滝の下流で竿を出していた。水を満々と湛えていかにも大物ニジマスが生息している雰囲気を漂わせている。その流心や瀬脇、深い淀みにルアーを飛ばすが、時たまウグイが竿を揺らすだけで、ニジマスの気配はない。おにぎりをほお張りながら、４時間程、ルアーを飛ばしたが無しの飛礫（つぶて）

である。
　大物を夢見て大川に来たが、釣れないとなると手軽に楽しめる川に気が移る。痺れを切らして内大部川に向かう。ここでは落ち込んだ私に２０㎝～３０㎝程のニジマスが何度も相手をしてくれては、また清らかな水の流れに帰っていった。

バッタのエサ

　本日は内大部川支流の下流域を攻めてみることにする。勤務終了後すぐに川に向かう。道々に架かる橋の下で仕掛けを竿に結ぶ。目印を移動させるとプッツリと道糸が切れてしまった。川の流れに合わせて目印を何度も上下させたので道糸が擦り切れていたのであろう。釣りを始める前でよかった。細流と言えどもいつ大物が飛び出して来るか分からない魅力のある川である。その時になってからでは遅いのである。
　エサ箱を開けると柳虫が羽化している。箱の縁をカサコソとよじ登り、羽を羽ばたかせてパタパタと飛び立った。何匹も飛び立って行く。そのうちのいくつかは茶褐色のサナギに変身しており、今にも羽化しようと体を蠢（うごめ）かしている。ミミズを確認するが、やはりこれも溶けてしまって、チップに交ざりエサ箱の縁に黒くこびりついている。真夏の季節だから致し方がないが、それを確認しないで出発する自分に腹が立つ。
　イタドリの茎を折ってみたが中にはまだ虫が入っていない。川原にいたバッタを捕まえる。それをエサに釣り上っていくがトロ場がない。今日は最後と思われる堰堤でようやくそのバッタにニジマス３５㎝と２０㎝が出た。

河童参上

　午後４時、内大部川本流の最上流部である第４橋より入渓する。まず、橋よりすぐの上流の大渕には何もおらず。次の水田用水取り入れのためのダム下の淵にも何もおらず。その上流の浅い淵でブドウ虫を流す。
　すぐに目印が沈んでいく。針が石にでもかかったのだろうと、軽く引くと、糸鳴りとともに一気に竿を伸される。右側から突き出た柳の木に道糸がからまり、かなり大きな魚がジャンプ一番、大きな音とともに淵に消えた。竿は２．７ｍ、道糸「銀鱗」１号、針はガマカツ柚７号にハリス１号、それは以前にも何度か使用したものである。
放心状態で針を見る
　ハリスはあるが針がない。針のチモトから切れているのである。ニジマスは何度も食らいつくのを経験しているので、仕掛けの全てを作り変えることにした。一度川から土手に上がり、気持ちを落ち着け、道糸はシーガーの１．５号、針はガマカツニジマス９号、ハリス１．５号である。さらに、先日、渓流用に購入したタモが車に積んであったので、取りに戻る。この場で準備できることはし終えたが、この細流で仕留めることができるのであろうか。川幅は２ｍほど、左側は譲岸されているがその下は抉（えぐ）れていて、崩れかけたコンクリートブロックを留める針金が見え隠れしている。右側の川縁には先程やら

れた柳の木が覆いかぶさっている。下流域もブッシュが突き出し同じ状況である。タモといっても、ヤマメ用の小さなものである。

奴が針を食いちぎっていってから２０分は経過しただろうか。気持ちを落ち着けて先程と同じ場所にエサを送り込む。２投、３投。出たーッ、奴だ。目印が沈んでいく。グィッと力強く手首を護岸の方へ返した。今度はグーツ、グーツと上流域へ進む。私も奴に合わせて後を追う。竿が真っすぐになる直前で奴は落ち込みにぶつかり前へ進めなくなった。奴は静かに停まった後、今度は徐（おもむろ）に向きを変え、こちらに突進してくる。奴は私の足元を掠（かす）め今度は下流域に向かう。私もその後に従う。浅くなったところで奴は見事な飛翔で川面から離れた。私の竿もそれに合わせる。そして、とって返してこちらに向かってくる。タモを差し出すが奴のスピードの方が私のなまくらな腕に勝る。護岸から突き出し川面を覆った葦（よし）の下を奴がくぐり抜けて行く。竿先を葦の下に送り込む。竿を握る手が葦の下をくぐり抜けることができなくなった時、竿に張り詰めていた緊張感がなくなった。またしても奴を仕留めることができなかった。奴があざ笑うように足元を悠々と泳いでいる。竿を離して、入るはずのないクモで闇雲に葦の下を掬う。しかし、そのタモからは水だけが滴り落ちるばかりであった。

放心状態で竿を見る

私の手から離れた竿が薮下から抜けて上流に向けて動き出した。奴だ。奴はまだ針から外れていなかったのだ。奴の力が竿から感じられなくなった時には取り逃がしたと思ったが、奴は身を反転してこちらに向かっていたのだ。慌てて竿を掴む。居る、奴が居る。竿を通して奴を感じることができる。さらに下流に奴が向かう。私が奴に追いつけなくなったころでジャンプを繰り返す。やっと奴の体が浮いた。空気を思いっきり吸わせることができた。２度３度とタモを躾（かわ）した後、観念したのか頭をタモに入れてくれた。空（す）かさず胸で奴を受け止め、川から這い上がった。

放心状態で奴を見る

銀びかのニジマスだ。メジャーで測ると４３㎝である。がしかし、体についた藍色の斑点がない。オビレやアブラビレについているはずの斑点も見当たらない。体の側線を桃色に染めているが顔付きや体つきはニジマスと全く同じだ。ひょっとするとこれがスチールヘッドという魚なのであろうか。こジマスの降海型で北海道でも稀に生息し、釣り人の竿にかかるという話である。内大部川は深川からさらに上流の石狩川の支流である。

最近、愛別町で釣り人がサクラマスを上げたということが写真と共に新聞に掲載されていたのを思い出す。密猟であるサクラマス釣りが新聞の記事になること事態が不思議なことだが、砂防ダムや深川の頭首工に魚通が完備されてきたので魚が海から遡上できるようになったと伝えている。そうなると、ニジマスの降海型がいても良さそうなものである。

第４橋より下流域を攻める。１㎞も下っただろうか。粘板岩の川底に水が茶褐色の色で染められている。アタリはなくこれ以上は無理と判断し、川から上がる。

夕暮れが迫って来た。川の淵からのっこりと河童が現れる時間帯だ。河童はいたずら好

きの動物として想定されているが、他の妖怪とは違って陽気でユーモアがあって余り残酷なことはしないようである。但し遅くまで川などで遊んでいると尻子玉を抜かれるという。尻子玉というのは何かよく分からないが、肛門から手を突っ込んで臓腑を抜き取るというのならちょっと恐ろしい。長年の厄介者である疣痔を取ってくれるというのなら有り難いのだが・・・。おそらくいつまでも川で泳いだりしている子どもを戒めるための話であろう。

川でいつまでも魚と戯れていると、俺の食事をどうするのだと河童が出てきそうである。河童が現れないうちに引き上げるとしよう。